

光榮堯夫（みつはな たかお）

昭和21年茨城県に生まれる。東洋大国文を経て，上智大大学院修士課程修了。

解釈・日本文学風土学会会員。

栃木県立小山高校教諭。

著書一詩集「白日の記憶」（国文社）「ふるさとの文学・栃木」（共著・文京書房）

「三島由紀夫参考文献目録」（右文書院）

現住所 東京都中野区中野 1—52—19 清水荘

三島由紀夫論

定価一六〇〇円

昭和五〇年一月二五日

初版

著者

光榮堯夫

発行者

竹森久次

発行所

五月書房

東京都千代田区三崎町二一八—二

電話 二三〇 四四九〇

振替東京 三三九四三

郵便番号 一〇一番

0095—12345—2409

光榮堯夫

三島由紀夫論

五月書房刊

序

——三島由紀夫に賭けた光栄の詩

本書の著者光栄堯夫君が私の教室に姿を現わしたのは六年前だったように記憶している。大学院に入学した目的は、日本近代文学に於ける浪漫主義の系譜を辿ることに主眼をおきたいというのであった。当時の大学院の主任教授は笹淵友一博士で、博士の代表的業績は「浪漫主義文学の誕生」であることは贅言を要しないところなので、私は光栄君の目的の成就が、まことに本学に学ぶにふさわしいものであると、その成果を期待することにした。

光栄君は私のゼミにも欠かさず出席し、力のこもった発表をすることに怠りをみせなかった。一見、脾弱そうにみえる体軀の中から、よくもあれほど旺盛な情念が燃えさかるものだ、その対象への粘着力のすさまじさと論旨の展開の鮮烈さに、しばしば舌をまく思いを強いられ、これは油断ならぬわいといった圧迫感に身のひきしまる緊張を禁じえなかった。

いささか、私事にわたるが、私の恩師本間久雄博士は常に後進の啓蒙に曲痺されながら「自分には人に教える資格などあると一度たりとも誇ったことはない。今日まで学び来ったことは、ひたすら己自身を啓蒙したいからで、それすら、なかなか完うしえたとはいえない」と口癖のように繰返された。これほど尊い教訓はないものと私もその驥尾に付して、教室に在っても、学生諸君

を啓蒙するまえに、まず己の不毛を反省する態度で臨むことにしているのであるが、優れた学生に接するたびに、驚馬に鞭うつ爽快さを覚える。例えば光栄君の出現の如きは私にとって、同学の友を得た喜びであった。

それで、当人から三島由紀夫を修士論文の題目に選ぶことにしたという報告をうけたとき、彼の目標とした浪漫文学の系譜探究の思考が恰好の獲物をつかんで結実をみたものと心から声援する気持を抱いたのであった。

ところが、いよいよ光栄君の論文の提出日が残すところ二カ月に迫ったとき、あの事件に彼は遭遇したのである。私は、これは困ったことになったと思った。折角、まとめかけている矢先に、光栄君の中の三島像が、あらたな事実によって騒乱され、筆を折るようなことにならなければよいかと危ぶんだ。はたせるかな、事件後のまもない日、私は沈痛な面持の光栄君の来訪をうけた。彼は玄関に立ったまま、一言「先生、もう、これでは書けなくなりました」と、かすかにつぶやいた。もしも、あのとき、光栄君が、当時のジャーナリズムを、賑わせた文壇評論家のそれのごとく、ああした終局が当然であるように、それを前から熟知でもしていたかのような言辞を、声高らかに叫びでもしていたら、私はむしろ反撥したかもしれない。

光栄君が、しおれきっていたから、かえって激励の言葉が私の口をついてでた。いま願えば、ずいぶん無責任なことをいったものだと思うのだが……。

「なにをいうのだ。君のこれまで構築してきた三島文学観が、こんなことで、ぐらついてなるものか。予定通り書きたまえ。君の三島を書き残せ!! それ以外に道はない」

私は光榮君の靴をぬがせず、追いたてるようにした。いま三島についてお相互に語るべきでない。語れば、光榮君の心を乱すだけだ。私も彼の顔をみるのがつらかった。光榮君は私の言葉を素直にうけ入れてくれて、兎も角、論文提出にふみきった。

その後、教職につかれ、職場の多忙の中で、生活の嵐が光榮君をさまざまにいたぶったようであつたが、彼はよくそれに耐えながら、遂に四年間の闘志が、この輝しい著述となつて世に送られることになった。「あとがき」によれば周囲の方々の友情と、はげましに、めぐまれていたようである。光榮君は人に愛される人である。愛される人から愛をさずける人への進展こそ今後の光榮君の人生に望むものであるが、本書は三島との対決によって、既に、それを果しているように私には思える。

本書は評伝の形式に拠りながら作家の内部を透視し、三島文学を客観的に検証する食指に、いささかのくるいをもみせていない。しかも言葉は清純で蘭陵の美酒の香を秘めている。それは著者が詩人であり、自らの詩魂に己を賭けているからである。三島を抱きかかえながら、三島を遊泳させ、さらに著者は天空高く飛翔しつづける。紺碧の蒼穹の色は著者の瞳に映じ、白銀の翼の羽搏きの音は光榮の詩の韻律に通う。批評文学を詩化した人の声を吾等は卒直に享受すべきであらう。

昭和四十九年十二月三日

目次

序——三島由紀夫に賭けた光栄の詩……………村松定孝

第一章 三島由紀夫の原点

- 一、その出自をめぐって……………7
- 二、密室の中の幻影——祖母夏子……………17
- 三、言葉と現実（肉体）……………23
- 四、『花ざかりの森』論……………35
- 五、三島由紀夫と日本浪漫派をめぐって……………41
- 六、戦争体験について……………50

第二章 自己変革の陥穽

- 一、失われた悲劇の再生——『輕王子と衣通姫』と『盜賊』をめぐって……………61
- 二、『仮面の告白』論——非在の告白……………74
- 三、仮構は可能か——『禁色』論……………85
- 四、行為への序説——『金閣寺』論……………103

五、『鏡子の家』論——状況の窓辺で	119
六、似非右翼イデオログへの道——『二・二六事件三部作』の周辺	131

第三章 『豊饒の海』論

一、青春への回帰——『春の雪』論	167
二、純粹行為の挫折——『奔馬』論	179
三、認識者によるエクスタシスへの道——『暁の寺』論	186
四、三島由紀夫の遺書——『天人五衰』論	202
三島由紀夫研究参考文献目録	231
三島由紀夫年譜	239
あとがき	261

第一章 三島由紀夫の原点

一、その出自をめぐって

永いあひだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあると言ひ張つてゐた。

（『仮面の告白』）

この背徳の記憶を前にして、読者は言葉をなくしてしまふに相違ない。虚偽だと思ひながら、不気味に迫ってくるリアリティ。世界中の文学に描かれた記憶の中でも、これほど異常な記憶はなからう。普通、人間の記憶は個人差が大きいとしても四、五歳から始まるものである。ただ記憶はいつも事実ではなく、事実のデフォルメされたものであるから、ここで一笑に付してしまうことは危険である。誰にでも特殊な記憶の一つぐらひはあるものだ。しかし、それにしてもこの記憶はいささか異常すぎよう。それでもなお私はこの不思議な記憶を信じることにしたい。一つの限りなく哀しい比喩として……。

ずっと後に、三島は北村小松を追悼した文（『空飛ぶ円盤と人間通』）のなかで、「遠い恒星よ

りももつと遠い自分の背中が見えてしまふ目を持った男、その男の不幸を、そのころから北村氏は知つてゐた」と述べ、見えすぎる眼の持主であつた北村の不幸を指適しているが、これはおそらく三島自身の告白でもあつたろう。『仮面の告白』の「私」の見えるはずもない光景を見たといひ切る倨傲さの中に、そういわざるを得ぬ哀しさを読みとればよいのである。二十四歳の三島の告白の中から、人は祝福にはほど遠い彼の生誕の悲哀、三島の言を借りれば、「何か鋭い悲哀、身を擦るやうな悲哀」（『仮面の告白』）を感じとるのではなからうか。事実、三島の不幸の第一歩は終戦とともにではなく、生まれて四十九日目に、母の手から祖母の手に渡つていったことに始まるといつても過言ではない。

三島由紀夫研究の場合、原点として戦争体験を重視する視点がほとんどであつたが、それ以前に彼の幼少年期を考察することが、まず重要なものではなからうか。なぜなら、三島は俗にいう戦中派の世代に属しながら、同世代の文学者とかどこか決定的な違いがあるからである。そして、そのことはあの奇妙な自決に結びついてゆく大きな原因でもあるような気がするのだ。したがって、私のこの論は彼の特殊な幼少年期にスポットを当てることから始められなければならない。一見何げなく平和な上流家庭の中に、三島の不幸のすべてが隠されていたと考えられるからでもある。

しかし、△反私小説作家▽△反リアリズムの文学▽という刻印を捺されている三島の作品から、その自伝的要素を抽出するのはかなり困難である。一応手掛りとなるのは、『仮面の告白』の一部（注一）、『椅子』、『詩を書く少年』、『私の遍歴時代』、『花ざかりの森』の一部、その他二、

三のエッセイと両親による『伴・三島由紀夫』などであろう。

三島由紀夫、つまり平岡公威^{きみなり}は大正十四年一月十四日の晩、東京市四谷区（現在新宿区）永住町二番地において、平岡梓、倭文重夫婦の長男として生誕したのであった。公威という名は、祖父定太郎の恩人で当時造船界の大御所であった古市公威よりとったといわれている。

祖父定太郎（文久元年生）は、兵庫県の横山という小さな村で農業を営む平岡太吉（万延元年生）の次男として出生、兄万次郎と同じく農業を捨て、神戸の漢学塾や神戸師範学校に学んだのち上京、さらに転々として苦学をつづけ、最後には法科大学（現東京大学法学部）に入学、明治二十五年三十歳で卒業し、内務省入りをした人である。そして時の内務大臣原敬の寵愛を受けた彼は、明治三十八年地方官大更迭の際大阪府書記官から一挙に福島県知事に抜擢され、さらに四十一年にはまたも異例の栄進を遂げ、樺太庁長官になったのである。まさに典型的な明治の立志伝中の人物であったといえよう。三島はこの祖父を、『仮面の告白』の中で次のように描いている。

……祖父がもつてゐたやうな、人間に対する愚かな信頼の完璧さは、私の半生でも他に比べられるものを見なかつた。

……中略……祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をしばしば旅した。

三島が祖父について述べているところは、祖母に比してはなはだ少ない。影響を受けなかった

ためであるといえ、それまでだが、祖父が農の出身であることを嫌ったためでもあったかもしれない。とにかくこのわずかな叙述から人物の像を結ぶことは困難であるので、他のものにも拠らなければならない。

白髪内相原敬氏の乾児として否、縦横の活手敏腕家として地方官中に、鏘鏘なる声名を博したる前樺太庁長官平岡定太郎君は、『大正人名辞典』

極めて円満かつ常識の發達せる人物にして、前年大阪府書記官たりし時も、福島県知事たりし時も、威張らぬ人、役人臭からぬ人、調子のよき人、として令名噴々たりき（鵜崎鷺城『朝野の五大閥』）

これらと前記から推定すると、明治の立志伝の人物にふさわしく努力家であり、単純で物事にこだわらず、信じやすくお人よし、いわゆる磊落豪放な人物であったのだろう。「酒よし女よし」（『倅・三島由紀夫』）であったことも知られている。スケールは大きい、極めて健全で平凡な人間であったのである。三島は何故こんなよい祖父に懐かなかったのだろうか。（たとえ祖母の強力な阻止があったにしても）

祖母夏子（奈津）、つまり定太郎の妻は、大審院判事永井岩之丞の長女である。岩之丞の父は徳川幕府の俊秀として活躍し、外国奉行、若年寄などを歴任、榎本釜次郎（武揚）とともに函館

の五稜郭に立籠った永井玄審尚志^{なほむね}で、夏子はその孫娘にあたる。また夏子の母は宍戸藩主であった松平頼位の娘、松平大炊守の妹であった。夏子はどうした二つの名門の血を受け継ぎ、さらに一族もすべて優れており、そのプライドはかなり強かったことであろう。三島はこの祖母を「狷介不屈な、或る狂ほしい詩的な魂」(『仮面の告白』)の持主として捉えている。士族としての誇り、妥協を許さぬかたくなな心、徹底したエゴイスト、それでいて鏡花(注二)や歌舞伎をこよなく愛した夢多きロマンチスト、おそらく現代に生きれば、何事かを成し遂げたであろう非凡な女性であった。三島は隔世遺伝として確実にこの祖母の血を受け継ぎ、また決定的な影響をも受けているといえよう。その点に関しては、後で触れることにする。

次に父、梓であるが、彼は二代目特有のやや個性に欠けた目立たない存在である。明治二十七年に生まれ、開成中学、第一高等学校を経て、大正九年東京帝国大学を卒業、農林省の官僚の道歩んだのち、水産局長を最後に勇退(昭和十七年)、その後は会社顧問などを歴任している。「一子梓氏は父に肖て活潑機智に富むと云ふ」(『大正人名辞典』)とされるが、定太郎のような荒削りのスケールの大きさはなく、高級官僚に相応しい知的で瀟洒な人物であろう。人に対して程よい暖かさや冷たさを持った典型的な上・中流家庭の父親であったはずである。『梓・三島由紀夫』を読んでも、やはりそうした印象である。問題はあまりない。父親でありながら、三島に与えた影響は一番少なかったのではなかったか。だが、そのことは無力すぎたということとも同じであろう。

文学はしばらくお休みにして、幸ひいい頭なのだから、その頭を物理とか機械とか化学とかいふ方向に使つて見る決心はつかないか。……中略……転向の決心はつかぬか？ 転換期日本の立派な少年として成人して行く気持はないか。……中略……明朗な少年！ になる気はないか。お父チャマは同年輩の少年の明朗な無邪気さを見ると何とも言へず悲しくなる。

この手紙は三島が「文芸文化」に『花ざかりの森』を発表、一躍最年少の作家として注目された時期に、父親から三島宛に書かれたものである。ここには文学者になろうとするわが子の将来を憂え、なんとしても阻止しようとする父の慈愛が溢れている。結局功を奏さなかったわけであるが、いたずらに名声などを求めようとせず、無意識のうちに文学の危険性を捉え否定した彼は、父親として立派であったといえようか。しかし逆にいえば、ついにわが子を理解できなかったきわめてノーマルな人物であった。立派な人格者でありながら、いや、おそらくそれが故に息子を少しも理解していなかったことが、『伴・三島由紀夫』（正・統）を読むと判然とする。

この父親とは対蹠的に、つねに三島のよき理解者であり、文学的成長を促した母、倭文重は金沢前田家の儒者の出で、父親橋健三は開成中学の校長をつとめた人でもあり、代々学者の家であった。彼女もその血を受け、聡明で文学的な女性であったのである。三島の中でこの母は絶えず美しいイメージとして生きつづけ、『仮面の告白』では「かよわい美しい花嫁」としてされている。この世間知らずの腺病質（幼年期の三島もそうであった）の美しい女性が、あの専制君主的な姑の許でよく仕えつづけたと思われるが、彼女の知性と優しさが崩壊から救っていたに相違

ない。

三島はこれらの肉親と六人の女中のいる暗く威丈高な借家に、高級官僚の子として生まれたのであった。当時の山の手の一般的な家の様子については、奥野健男の『評伝三島由紀夫』にくわしく書かれており、事実その通りであろうが、三島は当時のわが家について次のように述べている。

私の家は殆ど鼻歌まじりと言ひたいほどの気楽な速度で、傾斜の上を走りだした。莫大な借財、差押、家屋敷の売却、それから窮迫が加はるにつれ暗い衝動のやうにますますもえさかる病的な虚栄。『仮面の告白』

祖父定太郎が部下のひきおこした森林払下げの不正事件に対し責任をとり、樺太庁長官を辞職して以来、事業も思うようにゆかず平岡家は大きく傾いていったのである。それとともに一家の指導権は、定太郎より夏子へと次第に移り変わっていったものと思われる。それ以前は、「この母に傍若無人に猛打痛打を浴びせかけたのは、他ならぬ父でした」（『倅・三島由紀夫』）とあるように、一家は定太郎の豪放さそのままに、彼が絶対的な権力を握っていたのであろうが、地位の失墜に加えて、夏子の坐骨神経痛ヒステリーの発生（「死にいたるまでつづいたこの狂燥の発作が、祖父の壮年時代の罪の形見であることを誰が知つてゐたか？」）（『仮面の告白』）・「父があるいはトリッペルにとつつかれていたためかと思われまゝ。そのみならず、母自身も猛烈な坐

骨神經痛にかかり、一生苦しみ通したのですが、これも父のしわざだと医者の方のひそひそ話を小耳にはさんだことがあります」『伴・三島由紀夫』などにより、かれは仕方なく自分の位置を夏子に譲っていったのであろう。やはり罪の意識を感じていたのかもしれない。

この夫婦の位相を考えた時二人の極端な相違に気づかざるをえない。地方の農家の出身で成りあがりの男と、土族の血を継ぐ文化的な洗練された環境の下で育った優雅な女との組み合わせが、決してうまくゆくことはなかったであろう、ということに……。彼女は心奥で愛し愛されたいと思いつつも、徹頭徹尾定太郎を愛することができなかったに相違ない。そして侮蔑的な冷たい妻の視線に出会った時、夫はやりきれずにきまって酒と女に溺れてゆくものだ。噴き上がる妻の嫉妬、二人の溝は日々深まっていったことであろう。そこで妻は夫に対してすべてを諦め、己れの愛を一人息子に捧げてゆく。だが、それも長続きはしないのである。なぜならその息子は、やがて「かよわい美しい花嫁」を迎えてしまうからである。残された道はたった一つ、すなわち新しい命（孫）を花嫁の手から奪い取り、独占し、決して充たされなかった己が愛を心ゆくまで孫に注いでゆくことである。夢多き女の哀れな晩年であった、といえは言えよう。

このような経過を辿り、三島は生まれ落ちると間もなく祖母に引き取られ、祖母の手で育てられてゆくのである。すでに祖母の病氣はひどく、坐骨神経痛という肉体の激痛と充たされない心の渇きとによるヒステリーの渦の中で……。その中から人はかすかな、しかし鋭い母親の悲鳴を聴きはしないか。

私はこれで公威の暗い一生の運命はきまってしまったと思いました。

自決後、母親倭文重は『伴・三島由紀夫』の中でこう語っている。

ところで、祖父母と三島の具体的な生活はたとえば次のようなものであった。

食事はいつも祖母と私と差向ひで摂った。祖父は一人居間で摂った。『椅子』

かなり異状な生活形態であり、祖父母の断絶がきわめて深かったことを語ってなおあまりあろう。聡明な三島がこうした状態をどう受けとめて育ったかは、ゆうに一篇の小説になるはずである。「古い家柄の祖母は、祖父を憎み蔑んでゐた」(『仮面の告白』)とあるように、祖母は祖父を徹底的に軽蔑し、憎悪していたのであった。夜ごとの寝物語に、そうした感情を幼ない孫に植えつけつづけたに違いない。三島はいわば祖母の見果てぬ夢の中から生まれ出たといっても過言ではなからう。彼はこの祖母から祖父のように「わるい事をおぼえないやうに」(『仮面の告白』)小さな女の子でありつづけることを求められる。彼も祖母の願いによく応え、長い間そうした存在形態をとっていたので、ある日、閉ざされた狭い病室の中の女の子であることから解放され自由になった時、次のようにしか思えなくなっていたのである。

ところが、さうされた私は、それほど自由を享樂することはできなかった。私は病後はじ